

タガ 日本の縮の緩みの考察

金沢工業大学客員教授
(株)人間と科学の研究所 所長

飛 岡 健

日本文化の基底の形成について

—日本人は、もっと日本文化の拡がりと奥行きを本質的に学び、

日本に自信を持ち、世界と渡りあおう! —

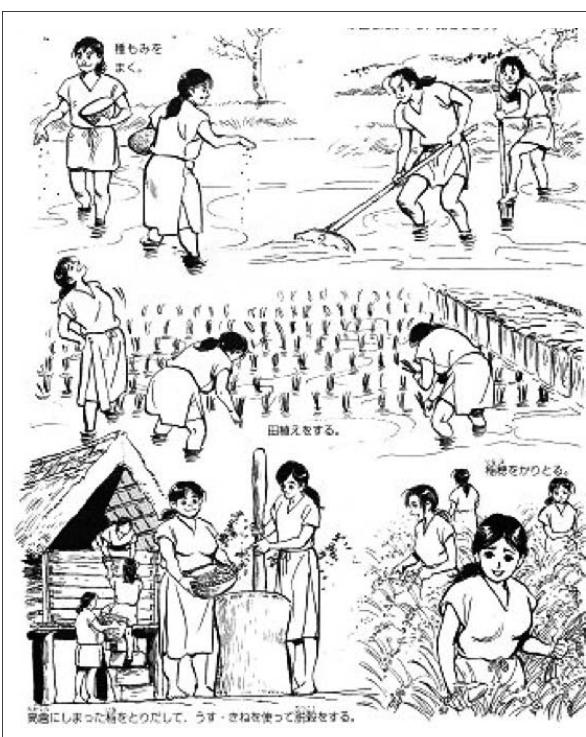
前回の(1)～(3)において、私は日本文化の拡がりと奥行きの深さについて述べ、その文化の基底について、多くの先人達の業績があり、説明力のある立派なキーワードや理論が作られている事を述べてきた。そして残された課題として、それらのキーワードや理論が日本の歴史の中でどのように形成されてきたのかを構造的、体系的に明らかにする事であると指摘してきた。その点について、これから触れていただきたいと思う。

(4) 定着型水田稻作農業生活に 日本文化の基底が

■日本(人)の歴史

実は日本人という言葉は厳密に論じていくと、今日の考古学や民族学、あるいは文化人類学はかなりのことを明らかにしているものの、まだミッシングリングが存在していて、決定的な論がもたらされている訳ではない。前述の『日本人はどこから

<日本の古来の農業(『古事記』より)>



来たか』において著者の斎藤忠氏は、かなり用心深く、日本人の、あるいは日本社会の歴史を考察してくれているので、ほぼその輪郭は浮かび上がっている。もち論、他の作品も多数ある。しかし、厳密に言えば未だ考古学は新しい発見を続けている。しかし、遺伝子のレベルから地球上の各民族の親近性を明らかにし、多くの旧説を塗り変えている。仮に、日本人論を縄文時代から始めるにしても、その頃の日本人が現存に繋がっているのか、弥生人にとって替わられたのかに關しても明確な説が打ち出されている訳では無い。

即ち元々の縄文人が残つていて、そこに弥生人が入り、上塗りした形で弥生時代が出来ていたのか、それとも完全に縄文人を滅ぼして、新しい日本人として弥生人が誕生したのかという議論が未だ戦わされている。

少なくとも、弥生時代の頃からは、定着型での水田稻作が日本各地で始まり、それが日本社会の中心となつていた事は明らかであろう。

それから第二次大戦の前までは、明らかに日本国民の3分の2近くの人口が農民であった事は客観的事実であり、日本社会の大半がその里山の村落に定住して水田稻作農業に従事し、その作業の中で、多くの特色のある資質を身に付けたことは間

＜春 田植え 祈願祭＞



＜秋 収穫 感謝祭＞



何よりも、浜口俊恵氏の語る西洋人の個人主義（インサイドアウト）に対し、日本人の“間人主義（アウトサイドイン）”のモデルは、村全体で主食の米を作り出す為に新田開発や水利用をし、田植えや稻刈りを行つてきた村全体が運命共同体である「蓮托生の共同生活の中から育つた人間モデル」と言えるであろう。そして、李御寧氏の『縮み』志向の日本人』も目の前に在る動かぬ田んぼという固定した作業場に、自分達の

更にそこでの村人達の収穫への努力には限界があり、「人事を尽くして天命を待つ」という考え方を身に付けざるを余儀なくされたのである。何故なら、田畠を耕して、田植えをしてから、秋の収穫まで人間の出来る事は、①水の調節、②施肥、③雑草取りが殆んどであり、秋の収穫は、『お天道様』が決めていた。即ち、①日照り（冷害）、②水枯れ、③洪水、④台風被害、⑤病虫害、⑥地震等は人為ではどうにもならぬものであり、祈願祭を行い、共に祈るしか方法はなかつたのである。

結果として、日本人は自然（お天道様）に対し、尊敬と恐怖の感情の交錯させる中で、ひたすら祈ると共に他方で一種の諦観を持ち、「神の御心のままに」という事を受け容れざ

違いないものと思える。そこには日本文化の基底の形成の鍵が存在していると考えるのが妥当であろう。

■水田稻作型定着農業の生み出ししたもの

洋人の個人主義（インサイドアウト）に対し、日本人の“間人主義（アウトサイドイン）”のモデルは、村全体

穫をいかにあげるかに葛藤してきた人々にとって、田んぼを大宇宙の現象や力の全てが反映する場であり、その中にマクロコスモス（大宇宙）の全てが反映するミクロコスモス（小宇宙）を見ていたと言えるであろう。それこそが縮み志向の日本人を生み出した原点であろう。

更にそこでの村人達の収穫への努力には限界があり、『人事を尽くして天命を待つ』という考え方を身に付けざるを余儀なくされたのである。何故なら、田畠を耕して、田植えをしてから、秋の収穫まで人間の出来事は、①水の調節、②施肥、

③雑草取りが殆んどであり、秋の収穫は、『お天道様』が決めていた。即ち、①日照り（冷害）、②水枯れ、③洪水、④台風被害、⑤病虫害、⑥地震等は人為ではどうにもならぬものであり、祈願祭を行い、共に祈るしか方法はなかつたのである。

結果として、日本人は自然（お天道様）に対し、尊敬と恐怖の感情の交錯させる中で、ひたすら祈ると共に他方で一種の諦観を持ち、「神の御心のままに」という事を受け容れざるを得なかつた。従つて、そこでは巨大な存在に対し、「長いモノには巻かれろ」の受け身的精神状態が形成せざるを得なかつたのである。

そして日本の自然環境は何よりも、『蓬萊島』であり、多くの面で豊穣であり、同時に厳しい生存環境とも言えるのである。3ヶ月毎に訪れる『春夏秋冬』は世界でも有数の規則正しい季節の移り変わりであり、しかしその季節の中での変化は諸行無常であり、変転流離の多様な光景を醸し出し、その多様性が日本人の心の中に反映し、生活の節を七十二節句にし、『句』を大切にし、楽しむ生活様式を形成し、世界的にも人間の感情を多くの単語にし、世界最短の文学と称される季語を取込んだ『俳句』を生み出し、短歌をこよなく愛好する民族を育てた。どうして出来たかは、別の機会に詳しく述べよう。村落共同体という同じ場所での運命を共にする人々の生存の積み重ねの中で、日本文化の基底がしっかりと形成され、そこに多くの海外文化が流入、そして独自の発酵が加わった事により、今日の日本文化が出来上がっているのである。

■『日本文化の隠れた形』の形成

次に『日本の隠れた形』の中で、著者の一人である加藤周一氏が指摘した四つの日本文化の形の特質について、定着型水田稻作農耕生活がそれをいかに育てたかについて考察してみよう。

第二は、『競争的な集団主義』であるが、水田稻作農業は、そもそも里山における村落での生活そのものが運命共同体であり、新田開発も、春の田植えも、秋の収穫も、集団的な作業であった。

しかし水争い、及び水の村落での配分のように、水を巡っては集団としての争いと共に、常に村落内の配分を巡つての競争が常 在して いた。そこでは常に収穫の向上の為の争いが平和的にも、暴力的にも行われてきたのである。また一人ひとりの農民の研究心と収穫向上への意欲は人々をして、集団内の競争へと培つたのである。

第二の『現世主義』に関しては、日本人は今、特に『旬』を大切にする民族であり、過去と未来に関しては、歴史好きであるが、歴史に学ばない民族であるし、「明日は明日の風

が吹く」、「時が解決してくれる」との考えが、一年毎のサイクルであると共に、その収穫が前述の如く、お天道様次第であり、長いモノに巻かれると考えざるを得ないところにそのベースがあると考えられるのである。今という時に、「全力で人事を尽くして、果報を寝て待て」なのである。

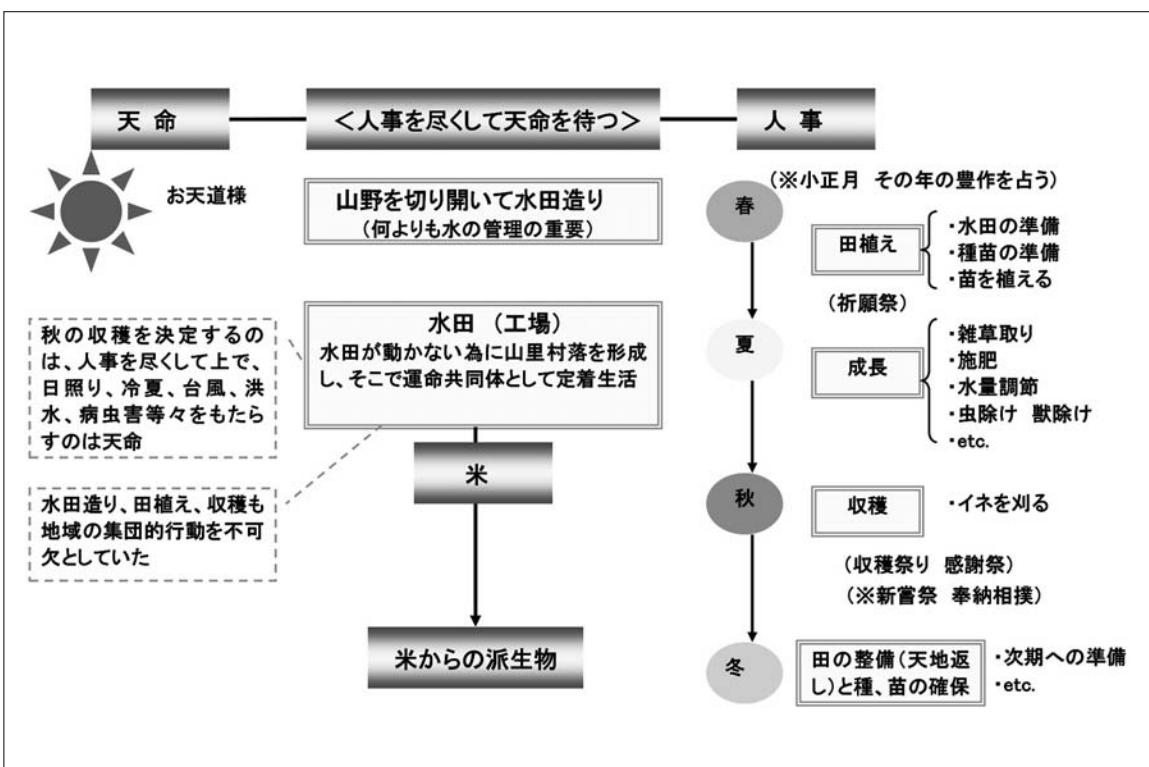
実はこれは第三の『国民的健忘症』とも関わっていて、現在を尊び、過去を忘れてしまうことと関係して

くる。狩猟・牧畜民族は生活そのものが7年サイクル以上であり、過去の狩場を知つて記憶しておく事が必要とされるが、水田稻作では、『生活の場の形成』ではなく、目の前に存在する水田での作業そのものが日々の生活の重要な場であった。一年々こそが、一つの区切りなのである。

そこでは「人事を尽くして天命を待つ」ことが唯一の手段であり、逆に「災害は忘れた頃にやつてくる」

であり、覚えていても余り役に立たないとの観念が支配的だったのである。それが社会の他の出来事へも波及し、未来と過去に関心の薄い日本を形成したようである。

第四の『集団内部の認識装置』とし



ての象徴の体系”に関しては、一方に外面向的な形式主義があり、他方には極端な主觀主義があり、お中元、お歳暮の如く、内面化されない外在的規制の複雑な体系に従つて、機能し

ていると同時に、他方では客觀的範として外在化される恥のような内面向的な感情に高い価値を置くようになつたと考えられる。

まさに、日本人を包むフレームは

義理という外面向的形式と内面向的合理な事が多い人情の攻め合いであり、定住型の水田稻作農業では、自らの能力を集団の力として發揮させる事が何よりも大切であり、その為には内部においては、相手の心

が望まれ、その為に明文化されない恥”という心の動きを表す概念が重要とならざるを得ないのであつた。

何よりも水田稻作農業では、定められた村落という場で生産性を上げ、集団生活を保つ知恵が必要であるし、動かない水田に自らの英知を注ぎ、かつそれを集団の成果としていく事が不可欠な撻とも、与えられた定めとも言わざるを得ない条件であり、そこで作り出されるのが日本人の資質であつた。

“村八分”という撻は、定住型であるからこそ形成されたし、英雄主義

の欠落は集団主義としての生活こそが、人々の生存を保障したので、特定の人物を英雄とする習慣は弱かつたのである。

そして、ある面で定住型の生活をする中で、見えるモノよりも、その

中にひそむ“見えないモノ”に対してもの関心の高さが生まれ、そうした感性が、芸術や文学の象徴主義に向かうと共に、日本海を渡つてくる渡来人の能力の高さから、海外への歓心を高めると共に“客神”という神の存在を生み出したのである。

〈おわりに〉

日本文化への影響

今回までは、日本の水田稻作農業

が日本文化の形成のベースであり、それこそが基層を作り、今日に至るまで底層（流）として脈々と流れていると語つたが、弥生時代からの社会の階層化と共に大きな集合体の形成、そして都市国家の形成は、水田稻作に従事しない支配階級を生み出し、そこに貴族文化、町人文化等の新たな文化の層を積み重ねてきた。

しかしそうした面においても、禪の導入と普及のよう、日本文化の基底（深層）の形成に欠かすことが出来ない大きな要因がいくつかあつた。その点に関しては、次回以降チヤンスがあれば描き出していきたいと思う。

